

張潮編纂の叢書について

—編集状況を中心に—

小塚 由博

はじめに

1. 叢書の構成と編纂の動機について
2. 『虞初新志』『凡例』に見られる編集状況
3. 『檀几叢書』『選例』に見られる編集状況
4. 『昭代叢書』『選例』に見られる編集状況
おわりに

はじめに

清初の文人張潮（一六五〇—一七〇九？字は山來、號は心齋居士、また三在道人。安徽歙縣の人）は、當時流行した小品作品を集めた3種の叢書『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』の編纂者として知られている。一方で彼は『幽夢影』

など多數の小品作品の作者としても活躍していた。彼は自身で述べているとおり、小品に關する熱狂的な愛好家であり、收集家であった。張潮の家は安徽歙縣で代々商賣をしていたようで、父習孔は仕官して山東の學政を務めた人物である。詒清堂とは張習孔の雅號であるが、その名が刻まれた版本が存在することから、張習孔や張潮の作品は主にここで出版されていたようである。張潮は仕官の道を諦め、のち揚州に居を移したが、あまり各地を歩き來することはなかったようである。張潮は揚州を據點として作品を集めて讀む一方、故郷の安徽や地元揚州の友人、知人たちを中心に、江南一帶の文人たちと幅廣く交遊を重ねた。場合によっては孔尙任など揚州に赴任してきた清朝の役人や王族などとも面識を持ったようである。

なお、張潮編纂の叢書については、日本では合山究^①氏が言及するだけで、殆ど研究されていない。中國では、ここ十年あまりの間に徐々に研究が行われるようになって^②いるが、まだまだ不明な點が多い。論者もここ數年張潮に關してしばしば私見を述べているが、決して張潮研究が主題ではなく、あくまで張潮から當時の江南における文人活動の一端を窺う事を主目的として研究を重ねてきた。例えば、張潮は今回取り上げる叢書や警句集『幽夢影』などの作品を制作する際に、多くの文人たちの手が介在している。そこで、本論では張潮が編纂した叢書がどのようにして編纂されていたのか、ということに着目し、叢書に採録された作品やその作者、また構成や編纂の動機などについて簡単に述べた上で、序文や選例などからその編集狀況について考察してみたい。

1. 叢書の構成と編纂の動機

1-1. 叢書のテキストと體裁について

まずは張潮が編纂に攜わった3種の叢書『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』について、その基本的な情報を確認しておきたい。⁽⁴⁾

『虞初新志』はもともと八巻本（一六八三年）⁽⁵⁾と二十巻本（一七〇〇年）が存在していたようであるが、現在遺っているのは二十巻本のみである。⁽⁶⁾二十巻本には約80名の作者の計150作品が収められている。一卷に収録されている作品数はまちまちで、恐らく葉數などで分けていたのであろう。

『檀几叢書』は初集五十巻、二集五十巻、餘集上・下巻からなり、張潮は初集では校閲を行い、二集・餘集では王暉と共編である。序文によると、初集と二集は一六九五年に出版されたことが分かる。また餘集ついてその詳細は不明であるが、恐らくあまり閑を置かずに出版されたものと考えられる。後述の通り、叢書は一卷一作品とし、初集、二集は50作品ずつ、餘集には58作品が収められており、その作品の作者はのべ112名に登る。

現存の『昭代叢書』は、甲集より癸集の十集および別集の合わせて十一集からなるが、実際に張潮が編纂したのは甲集・乙集・丙集（弟張漸と共編）の三集であり、丁集以降（己・庚・辛・壬・癸集・別集）は張潮の死後、道光年間に沈懋愷が別に編纂したもので、その時には既に甲・乙・丙集の一部が散逸しており、合わせて沈懋愷が補完し編集し直している。また沈懋愷は各集より名作を選んで抜き出して別集六十巻とし、抜き出した作品の代わりに獨自に選り出した別の作品を入れ、「甲集補」「乙集補」というように補っている。叢書の巻數は『檀几叢書』初集・二集と同様にそれぞれ一集五〇巻で統一されており（別集は六十巻）、また同様に一卷一作品となっている。出版年については、序文によると、甲集は一六九六（康熙35）年、乙集は一七〇〇（康熙39）年、丙集は一七〇三（康熙42）年である。作者の數は約90名ほどである。

ただし、『昭代叢書』に関しては、テキスト上大きな問題が存在する。それは前述の通り、『昭代叢書』が中國ではそ

の一部が早くに散逸し、道光十三年（一八三三年）に沈懋憲の手によって補完されていることである。本論で使用したテキストは、この道光本（沈懋憲輯）の影印である。一方、康熙刊本（詒清堂刊本）も存在しており、³ 両者は収録する作品に若干の違いがある。それについては、本論では紙数の都合上あまり詳しく述べないこととし、必要最小限の言及に留めたい。

1—2. 収録作品とその作者について

まずは各叢書に収録されている作品の作者について、作品数の多い者および著名人を挙げておこう。

『虞初新志』約八〇名〔（ ）は収録作品数、以下同じ〕

陳鼎（13）、周亮工（9）、鈕琇（9）、徐芳（8）、陸次雲（6）、魏禧（4）、毛奇齡（4）、王猷定（4）、朱一
是（3）、王暉（3）、余懷（3）、侯方域（3）、王士禛（2）、毛際可（2）、陳玉璫（2）、高士奇（1）、錢謙
益（1）、杜濬（1）、李漁（1）、方苞（1）、毛先舒（1）……

『檀几叢書』一一二名

張潮（9）、程羽文（6）、丁雄飛（5）、王暉（4）、宋瑾（4）、尤侗（4）、王士禛（3）、徐士俊（3）、黃宗
羲（2）、毛先舒（2）、黃周星（2）、黎遂球（2）、鈕琇（2）、閻若璩（1）、陸次雲（1）、狄億（1）、毛際
可（1）……

『昭代叢書』およそ九四名（ただし、張潮編纂の甲・乙・丙集に限る）

毛先舒(6)、毛奇齡(6)、王士禛(6)、王暉(6)、吳肅公(5)、高士奇(4)、陳鼎(4)、魏禧(4)、尤侗(3)、冒襄(2)、王言(2)、黃周星(2)、吳陳琰(2)、孔尚任(2)、王士禛(2)……

この三作品は成立年代が近いこともあるのか、複数の叢書を跨いで作品が収められてる作者も多数存在する。例えば、この3種の叢書ともに作品が採録されている人物は、黃周星(『虞初新志』以下「虞」)1・『檀几叢書』(以下「檀」)5・『昭代叢書』(以下「昭」)2、閔麟嗣(虞2・檀3・昭7)余懷(初3・檀1・昭2)、王暉(虞3・檀4・昭7)、尤侗(虞1・檀3・昭5)、王士禛(虞2・檀3・昭8)、陸次雲(初3・檀1・昭2)、吳陳琰(初1・檀1・昭3)、毛奇齡(虞4・檀1・昭6)、宋肇(虞1・檀2・昭1)であり、彼らはみな張潮の友人であり、各々やりとりした書簡が存在する。また、2種の叢書ということになれば、江之蘭(檀2・昭1)、龔賢(檀1・昭1)、顧彩(虞2・昭1)、秦松齡(虞1・昭1)、宋曹(虞2・昭1)、吳肅公(檀1・昭5)、狄億(檀1・昭1)、陳鼎(虞13・昭5)、梅文鼎(檀1・昭1)、閻若璩(檀1・昭3)、高兆(檀2・昭3)、毛際可(虞1・檀1)、方象瑛(檀2・昭2)、朱彝尊(檀1・昭1)、王言(虞1・昭2)などがある。この内『檀几叢書』と『昭代叢書』という組み合わせが多いことはもしかすると何らかの理由が存在するのかもしれない。

さて、次に各叢書の代表的な作品を挙げ、その特徴を見ておこう。

『虞初新志』に収録されている作品は、例えば魏禧「大鐵椎傳」(巻一)、宋曹「義猴傳」(巻一)、余懷「王翠翹傳」(巻八)、陳鼎「烈狐傳」(巻十)、陸次雲「陳圓圖傳」(巻十一)、侯方域「李姬傳」(巻十三)、徐階鳳「會仙記」(巻十四)、繆彤「述怪記」(巻十五)、「閔公子傳」(巻十七)、鈕琇「燕觚」(巻十九)など、伝統的な文言小説が中心である。その他、林嗣環「秋聲詩自序」(巻一)、余懷「寄暢園聞歌記」(巻四)、侯方域「郭老僕墓誌銘」(巻七)、宋肇「筠廊偶

筆」〈卷十〉、周亮工「書姜次公印章前」「因樹屋書影」〈卷十六〉、王言「聖師錄」〈卷十八〉、南懷仁「七奇圖說」〈卷十九〉など、様々な文體・内容の作品も収録されている。

『檀几叢書』は、『虞初新志』とはかなり傾向が異なる。試みに初集の作品を10作品ほど順番に列挙してみると、徐士俊「三百篇鳥獸草木記」、徐士俊「月令演」、黃宗羲「歷代甲子考」、徐汾「二十一史徵」、宋實穎「黜朱梁紀年論」、金諾「韻史」、洪若皋「釋奠考」、繆彤「臚傳紀事」、毛先舒「喪禮雜說(附常禮雜說)」というように、文體も内容もより多種多様な作品が収められている。この他、莊臻鳳「琴聲十六法」、陸圻「新婦譜」、徐震「美人譜」、余懷「婦人鞋轆考」、張潮「酒律」、諸九鼎「石譜」、張鋼孫「獸經」、陳鑑「江南魚鮮品」〈以上初集〉、閻若璩「孟子考」、崔學古「幼訓」、黃宗羲「七怪」、金人端「念佛三昧」、王士禛「漁洋詩話」、王槩「學畫淺說」、丁雄飛「小星志」、張仁熙「雪堂墨品」、周高起「陽羨茗壺系」〈以上二集〉、陸次雲「山林經濟策」、宋起鳳「家塾座右銘」、江之蘭「香說齋樂事」、尤侗「豆腐戒」、程羽文「詩本事」、毛際可「燈謎」、徐士俊「婦德四箴」、尤侗「負卦」、孫蘭「古今外國名考」、黃百家「明制女官考」、梅文鼎「南極諸星考」、成性「選石記」、沈士瑛「美人揉碎梅花迴文圖」、曹之璜「西湖六橋桃評」、王暉「課婢約」〈以上餘集〉など枚擧に暇がない。文言小説の類いは殆ど収録されておらず、それ以外の筆記・散文作品が中心である。

『昭代叢書』の収録作品も、その傾向は『檀几叢書』によく似ている。吳鼎公「天官考異」「五行問」、梅文鼎「學曆說」、施璜「塾講規約」、林雲銘「讀莊子法」、徐沁「謝臯羽(翱)年譜」、黃周星「將就園記」、尤侗「外國竹枝詞」、李仙根「安南雜記」、李沂「秋星閣詩話」、宋曹「書法約言」、余懷「硯林」「板橋雜記」「冒襄「宣爐歌注」、王暉「龍經」〈以上甲集〉、閻若璩「毛朱詩說」、吳陳琰「春秋三傳異同考」、魏禧「師友行輩議」、王士禛「國朝諡號法」「琉球入太學始末」「廣州遊覽小志」、方象瑛「封長白山記」、孔尚任「人瑞錄」、許承宣「西北水利議」、王言「連文釋義」、孔衍弢

「畫訣」、林佶「漢甘泉宮瓦記」、江之蘭「醫津一筏」、高士奇「江村草堂記」(以上乙集)、萬斯同「漢魏石經考」、毛奇齡「檀弓訂誤」、王穀「讀史管見」、高士奇「松亭行紀」、申涵光「荊園小語」、王仕雲「格言僅錄」、姚廷傑「戒淫錄」、閔麟嗣「古國都今郡縣合考」、徐懷祖「臺灣隨筆」、陳鼎「滇黔土司婚禮記」、毛奇齡「西河詩話」、徐鉉「南州草堂詞話」、薛熙「鍊閱火器陣記」、梅庚「知我錄」、褚人獲「續蟹譜」(以上丙集)などやはり多種多様である。

以上のように、『虞初新志』は文言小説集としての性格が強く、『檀几叢書』『昭代叢書』は筆記・散文が中心である。だから三者、特に『虞初新志』と『檀几叢書』および『昭代叢書』とはそれぞれ叢書として一見性格が異なるように見られる。もちろん、嚴密に言うとそうであるかもしれない。しかし後述の通りこの三つの叢書の編集方針や編纂方法については共通点が多い。また編者である張潮は『檀几叢書』『昭代叢書』の序文などで、収録した作品が短編の作品、つまり「小品」であると稱しており、作品の内容や體裁を問わず、この3種の叢書を「小品作品を集めた叢書」と認識していたようである。もしかすると、叢書を問わずとにかく作品を集めた上で、文言小説は『虞初新志』、その他の筆記・散文は『檀几叢書』または『昭代叢書』に振り分ける、といった大雑把な方針だったのかもしれない。なお、當然、文・史・哲といった分類は近代以降のものであり、張潮の意識はもっと廣範圍のものであった、と考えられる。これについて精しくは次に考察しようと思う。

1-3. 編纂の動機について

本論の趣旨とは若干異なるかもしれないが、叢書の編纂方針や編纂方法を考える上で重要なのは、そもそも張潮はいったいどのような動機によってこの3種の叢書を編集出版しようと思ひ立ったのか、ということであり、それについて少し觸れておく必要があるだろう。詳しくは別の機會に述べることとし、本論では簡單に見ておきたい。ただし、『檀几叢書』はもともと王暉が編纂した叢書なので本論では割愛する。

まず、『虞初新志』の「自序」⁽⁹⁾から見てみることにする。⁽¹⁰⁾これは康熙癸亥（康熙二十二年・一六八三年）新秋に書かれたものである。

この序文では、まず敷え切れないほど存在する伝統的な筆記小説が、形式的で表面的な内容のものが多くなり、また単なる模倣作品を作り出していることを指摘する。宋以降に編纂された『夷堅志』や『艷異編』などを挙げながら、筆記小説の内容の多彩さを述べつつ、話は『虞初志』を点校し、『續虞初志』を編纂した湯顯祖の事例に及ぶ。なお、本文中の「飛仙盜俠、牛鬼蛇神」や「小説家之珍珠船」などの語は、湯顯祖が『虞初志』に附した序文の言葉を用いたもので、その他にも湯顯祖の序文から影響を受けたと思われる記述が存在する。⁽¹¹⁾いずれにせよ、ここで張潮は『虞初志』および『續虞初志』を世に出したことを評價する一方で、唐代までの作品が多いことと、その収録作品数の少なさおよび採集範囲の狭さを指摘する。そこで、張潮は續編の編纂を決意し、〈彼から見て〉最近の作者の作品を集めようと考えたようである。

なお、『虞初新志』は前述のように、この序文が制作された一六八三（康熙22年）に八巻本として出版されたようである。そして、一七〇〇（康熙39）年には、二十巻本として出版され、現在通行しているテキストはこの二〇巻本のようであるが、清代では度々版を變えて出版された。その時に張潮は「總跋」⁽¹²⁾を制作しているが、それが作られた頃と「自序」の頃とは張潮が置かれた環境が一變しており、「自序」の記述とはかなり毛色が異なる。「總跋」は康熙庚辰（39・一七〇〇年）の初夏に書かれたものである。以下に簡単な内容を記しておく。

まず、張潮は「困窮する狀況に陥らなければ、後世に書を著すことはなかったであろう（古人有言、非窮愁不能著書以自見於後世）」という司馬遷の言葉⁽¹³⁾を引用し、そして「そもそも苦しみによって書を著せば、その書には必ず抑鬱無聊の氣持ちが込められていることが多い（夫人以窮愁而著書、則其書之所蘊、必多抑鬱無聊之意、以寓乎其間）」と續

けている。これは張潮が正しくその境遇にいたことを示している。張潮は、この前年の康熙38（一六九九）年に大きな事件に巻き込まれた。先行研究に據るとそれは親しい者の誣告によって獄に繋がれたことを指すようである。その結果、家財の多くを失い、生活に貧した張潮は一時氣力も失ったようである。しかし、佛教の「羅提波羅蜜（多）」（六波羅蜜の一つ、堪え忍ぶこと）に學ぶ一方で、友人から贈られてくる作品を讀んでは憂さを晴らしていたようである。後述の通り、新たな叢書の編集を行う氣力も資金もなかった張潮であるが、この歳には『虞初新志』二〇卷本と完成しかけていた『昭代叢書』乙集を何とか出版し、3年後には弟張漸の力を借りて『昭代叢書』丙集を出版している。序文末尾に「世に心ある人は少なくないが、しかし私の敢て望むところではございません。（世不乏有心人、然非予之所敢望也）」という部分はもしかすると、何らかの援助を期待してのことかもしれないが、現段階では不明である。

次は『昭代叢書』の記述を見てみようと思うが、甲集、乙集、丙集にそれぞれ序文が附されており、若干の溫度差はあるが基本的に言わんとすることは同じである。ここではその一例として甲集の序文の一部を挙げておこう。

一代之興、必有一代之著作、而于治定功成之後、尤必有新奇瑰麗者出乎其間。于以鼓吹休隆、輝煌典籍。蓋非徒爲文字之觀、實國家榮華之氣所輻洩而成者也。其篇幅繁多者固無難孤行于世。若夫零星小品、雖卷之不盈一握而精言妙義、九足動人。吾儕性之所近。往往欲萃薈。其所最嗜者以自怡悅。譬之、集千狐之腋以爲裘、合吾侯之鯖而作饌。寧不衣之適體而餐之果腹乎哉。昭代之興已五十餘載、不特武功之盛爲前代所莫大而文教之隆尤覺超越往古良。由聖天子加意右文以故英才輩出、而諸先達復相與倡帥風雅于賡歌颺拜之餘。聲教所通、漸摩日久、雖遐陬僻壤、莫不家敦絃誦、而戶浹詩書、猗歟休哉。何道之隆也。：

（一代が興ると必ず一代へに相應しい）の著作が作られます。國が治まり功成った後、とりわけ必ず新たに珍しく

美麗な著作がその間に出現するものです。ここに美しさを主張し、典籍を耀かすことになりました。思うに、いたずらに文字を書くという觀點だけではなく、まことに國家繁榮の氣がこぼれ出して出來上がったものでしょう。その邊幅が多ければもとより世に行われるものです。星屑のような小品作品などは、卷數が一握りに満たないものはありませんが、精言妙義があり、何度も人を動かすにたり得るものです。〈これは〉私の性分と近いところにあり、しばしば採集しようと思っておりました。その最も嗜好するものは、自分自身でも楽しむものです。これを例えるならば、手に入れるのが困難な千匹の狐の腋〈腋の下の皮〉を集めて裘を作り、美味である五侯の鯖を合わせてごちそうにするような〈希有な〉ものです。寧ろこれを着れば體型にぴったりと合い、これを食べれば腹一杯になることでしょう。昭代〈清朝〉が興ってすでに五十餘年、ただ武功の盛況ぶりが前代より大きいだけではなく、文教の隆盛はとりわけ昔を超越しております。聖天子〈康熙帝〉は意を右文〈文治〉に加えられ、そのため英才が排出して諸先達はともにもたまたま應酬詩や唱和詩を制作したり、揚拜したりする餘暇に詩文を獎勵しました。天子の徳が次第に世に通じていき、僻地であっても家で學藝が盛んに行われ、詩書があまねく讀まれないことはなく、まことに素晴らしいことです。何と盛んなことではないでしょうか。……

張潮は、小品が時代の繁榮からこぼれだした星屑のようなものだと述べ、しかし小さいながらも、その中に深くて優れた内容を含んでいることを指摘する。そしてまたそのような作品がもともと張潮自身の興味を引いており、何れはそれらを採用して叢書にしたいと考えていたようである。

2. 『虞初新志』「凡例」に見られる編集状況

以下、第四節まで、各叢書の凡例（選例）を中心に、編集の状況や事情などについて書かれた部分を抜き出して、それぞれ考察してみようと思う。なお、各叢書の序文などにも関連する記載は存在するが、本論では紙数の都合により必要な部分だけ紹介するに留めたい。

まずは『虞初新志』に附された「凡例」から編集状況について見てみようと思う。ところで、この「凡例」はいつ附されたのだろうか。恐らく、内容から考えて一七〇〇年の二十卷本発刊の時ではなく、一六八三年の八卷本を出した時ではないか。

なお、『虞初新志』の「凡例」は十則に分かれており、これに便宜的に簡単な内容を標題として付け、原文に①、②と「凡例」の順番を表す番號を振った。以下、『檀几叢書』『昭代叢書』の「凡例」〈選例〉についても同様に原文の段落ごとに番號を振って示した。

a. 採集過程と作品の募集

⑧鄙人性好幽奇、衷多感憤。故神仙英傑、寓意四懷。外史奇文、寫心一啟。予向有才子、佳人、英雄、神仙四懷詩及徵選外史啟。生平幸逢祕本、不憚假抄。偶爾得遇異書、輒爲求購。第愧搜羅未廣、尤慚采輯無多。凡有新篇、速祈惠教。竝望乞鄰而與、無妨舉爾所知。

（私はもともと幽奇を好むたちで、〈それによって〉心に奮い立つことが多い。だから神仙や豪傑について思いを「四懷」に寓し、外史、奇文について心境を「一啟」に書きとどめました「先に私には才子・佳人・英雄・神仙

〈を描いた〉「四懷詩」⁽¹⁶⁾および「徵選外史啓」⁽¹⁷⁾があります」。ふだん幸運にも祕本に巡り逢えば、迷わず書きとどめ、たまたま異書に出遭えば、すぐに買い求めました。ただ搜索が狭く、とりわけ采輯が少ないのを耻じ入るばかりです。おおよそ新編があれば、すぐにお教え下さることを望みます。また、隣に貰って〈私に〉お與え下さり、あなたのご存知のこと〈作者?、作品?〉を遠慮無くお教え下さい) ※「」内は原注、以下同じ

これは、三つの叢書全體に言えることであるが、採集した作品は、むろん作者本人が張潮に手渡したり、張潮が自らの足で探し求めたものもある一方で、友人・知人の手を介して集めたものも少なくない。また場合によっては友人・知人等に作品の存在や所在、あるいは作者に關する情報などを募集し、その情報を得ていたようである。

また、別の凡例では次のように述べている。

⑨是集祇期表彰軼事、傳布奇文、非欲借選沽名、居奇射利。已經入選者、儘多素不相知。將來授梓者、何必盡皆舊識。自當任剗剗之費、不望惠梨棗之貲。免致浮沉、早郵珠玉。

(この集はただ軼事を表彰し、奇文を傳播させることを期したものであり、名聲を上げたり、營利を目的にしようとしたものではありません。すでに叢書に入れている〈作品の〉中には、まだあまり「面識が無い者の作品も多く、將來作品をいただく豫定の方でも、必ずしも皆舊知とは限りません。自ら出版の費用は戴いても、書籍の代金を恵んで貰うことは望みません。世のしがらみにとらわれず、至急珠玉をお贈り下さい)

ここで注目すべきは、一つは作品を贈ってきたのが友人でも、全くの赤の他人でも、分け隔て無く編集方針に則って

採用する、ということである。友人だからといって優遇したり、全ての作品を叢書に入れるということは、原則として行わなかったようである。これは、世の作者で、自ら出版する術や元手の無い者にとっては非常に有り難いことであらう。實際その結果として、投稿してくる作者がかなりの數にのぼり、編集が間に合わなかったり、非常に手間が増えたようである。もう一つは、それとも関連することだが、出版の費用については、経費はともかくとして、書籍の代金は貰わない、ということである。これも、作品を投稿する者たちにとっては非常に有利なことであったが、一方で編者の張潮は後日その費用の工面に困ることとなる。

b. 同名作品重複の場合

④一事而兩見者、敘事固無異同、行文必有詳略。如大鐵椎傳、一見于寧都魏叔子。一見于新安王不菴。二公之文、眞如趙璧隋珠、不相上下。顧魏詳而王略、則登魏而逸王、祇期便于覽觀、非敢意爲軒輊。

(二つの話で〈作品が〉複數見られる者は、敘事にはもとより異同がなくても、文章には必ず精粗があります。『大鐵椎傳』の如きは、一つは寧都の魏叔子〈禮〉に見られ、一つは新安の王不菴〈煒〉にも見られます。二人の文章は、まことに趙璧や隋珠のようで、甲乙つけがたいものです。魏〈禮の記述〉は詳しく、王〈煒の記述〉は詳しくないので、魏〈禮の作品〉を登用して王〈煒の作品〉を外すことにしましたが、〈これは〉ただ閱覽に便を期すためであって、優劣によつたわけではございません)

實際に『虞初新志』には、魏禮の『大鐵椎傳』(卷一)は收められているが、王煒のものは存在しない。王煒は張潮と同郷の友人であるが、その友人であっても、編纂方針を優先していたことが窺える。むろん、文章家として高名な魏禮に配慮したとも言えなくもないが。また、凡例に挙げたということは、恐らく、これはその一例に過ぎず、他にもこ

のようなケースがあったと想像できる。なお、王煒の『大鐵椎傳』が實在するか否かは不明である。

c. 収録の順番について

⑥ 序爵序齒、從來選政所無。或後或先、總以郵筒爲次。不能虛簡以待、亦難縮地以求。隨到隨評、即附劄削之手。投函投刺、勿煩酬酢之勞。次第未可拘拘、知交定稱爾爾。

(爵位や年齢で順序を附けることは、從來編集作業には無いものです。〈順序の〉前後はすべて〈原稿の〉到着順です。〈叢書に〉空きを作って待っていることは不可能で、また直接求めることも困難です。到着した作品ごとに批評を加え、すぐに印刷に回しました。書簡や名帖を届けるのに、應酬の勞を惜しまぬよう。〈作品の?〉順序はまだ知人の名前に拘っておりません)

この記述から、叢書に收められた作品の順番が、その文體・内容や作者などによって組み替えらることはあまりなかった、ということがわかる。これは後述の『檀几叢書』や『昭代叢書』とも共通している。

d. 叢書の體裁について—氏名の記載方法—

② 虞初志原本、不載選者姓名。湯臨川續編、未傳作者氏號。俱爲憾事。或屬闕文、載考委宛餘編。虞初爲漢武帝時小吏。衣黃乘輜、采訪天下異聞。以是名書。亦猶志怪之帙、即齊諧以爲名。集異之書、本夷堅而著號。

『虞初志』の原本は、選者の姓名を掲載しておりません。湯臨川〈顯祖〉の續編(『續虞初志』)でもまだ作者の氏號を傳えておりません。これはともに遺憾なことです。もし闕文に屬するものであれば、『委宛餘編』〈宛委餘編、王世貞の著〉を参考としました。虞初とは漢の武帝の時の役人で、黃衣を着て車に乗り、天下の異聞を採集した人物です。そこで〈彼の名を〉書名としました。また志怪の作品集は『齊諧』と名付けられました。〈『虞初志』と同

じく〉異聞を集めた〈本〉書は、『夷堅志』に基づいて〈作者の〉雅號を著しました)

⑤頼古堂藏弄結隣諸選、彙其人之文、專系于姓名之下。蝸寄齋尺牘新語三編、別其文之類、分敘于卷頁之中。固云整整齊齊、未覺疏疏落落。今茲選錯綜無次、庶不涉于拘牽。且其事荒誕不經、無庸分夫門類。讀書之暇、展卷儘可怡神。倦息之餘、披翻自能豁目。

〔頼古堂〔周亮工〕の『〈尺牘〉藏弄集』『〈尺牘〉結隣集〕の諸選は、その人の文章を集めるのに専ら姓名の下に續けております。蝸寄齋〔徐士俊?〕の『尺牘新語〕三編〔未詳〕は、文章の種類で分類し、巻頁の中に〈姓名を〉記しております。もとよりきちんと整理整頓されていると言うべきですが、まだおろそかにしている部分があるようにも思えます。今この選『虞初新志〕は入り交じって順序がなく、ほぼとらわれることはありません。その上その事柄は荒唐無稽であって、常に分類するわけでもありません。讀書の骨休めに巻を廣げればきっと心を樂しませ、疲れている時の氣休めに〈この書を〉紐解いて開けば、ぱちちりと目が開くことでしょう)〕

ここでは、作品の著者名の銘記について、他の作品・叢書を参考にしていたことがわかる。實際に『虞初新志』では、例えば、目次では書名の下に出身、姓名、字または號が記されている。また、ここで興味深いのは、尺牘の例を擧げていることである。後に張潮は自分の手紙と、友人から貰った手紙をそれぞれまとめて尺牘集(『尺牘友聲集』と『尺牘友聲偶存』)として編纂している。もしかすると、これらを参考にしたのかもしれないが、本論ではこれ以上述べないこととする。

e. 評語の附加について

⑦文自昭明而後、始有選名、書從匡鄭以來、漸多箋釋。蓋由流連欣賞、隨手腕以加評、抑且闡發揄揚、竝胸懷而迸露。茲集觸目賞心、漫附數言于篇末、揮毫拍案、忽加贅語于幅餘、或評其事而忼慨激昂、或賞其文而咨嗟唱嘆。敢謂發明、聊抒興趣。既自怡悅、願共討論。

(文章は昭明へ太子の『文選』以降、始めて選名を持つこととなり、書は匡(衡)鄭(玄)以來、やっと箋や釋が多くなりました。思うに流連欣賞することで、思うまま評を加えるのは、抑も(何かを)發揮したり持ち上げたり、胸中の想いを述べて(その気持ちを)吐露するものだからです。この集は目に觸れたものを鑑賞して、みだりに數言(への評語?)を篇末に附したり、筆を揮って机を叩いて、すぐに贅語を紙面に加え、その事を評して梗概激昂し、その文章を鑑賞して咨嗟唱嘆したものです。あえてものの道理を明らかにしようと思ひ、聊か興趣を述べようと思ひます。すでに自ら喜んでいただけのなら、共に討論して下さることを願っております)

『虞初新志』と『昭代叢書』には、各作品の末尾に張潮の評語が添えられている。評語では作品や作者について短文で巧みに批評が加えられており、當時流行していた評語の文化を知る重要な手がかりの一つである。

3. 『檀几叢書』「選例」に見られる編集状況

さて、次に以下『檀几叢書』の選例における記述よりその編集状況の一端を窺ってみたいとおもうが、確認しておきたいことは、張潮が『檀几叢書』の編纂に本格的に加わったのは二集以降であるということである。むろん、後述の通り張潮が編纂に加わった後、初集についても、溯って校訂や編集の一部を手傳っており、王暉が作った初集の選例につ

いても、恐らく張潮の意志が反映されているのではないか、と考えられる。それは二集の選例で「遴選義例、前集已詳（選例は前集にすでに詳しく述べた通りである）」と言っていることから窺える。

以下、各選例について詳しく見てみたいと思うが、a、eは『檀几叢書』初集、f以降は二集の選例である。なお、餘集には選例は附いていない。

まずは初集の選例であるが、これは5つの項目に分かれている。

a. 収録作品の種類について

①一、是書專載小品、不及大文。然必其足以裨風化而助博洽者、始爲采輯。譬終日莊語聞風諭一辭則莫不粲然頤解、亦文卷中息遊之道也。古樂恐臥覽者、毋深譏焉。

（この叢書は専ら小品を掲載し、大文は含みません。しかし風俗を教化をさせたり、博學廣聞の助けとなるものも、新たに採輯したばかりです。それは例えるなら一日正論を語る間に風諭の一辭を聞けば、口を大きく開けて笑うに違ひなく、また作品中の骨休めになるということでもあります。むかしの人の楽しみ方は、きつと寝そべって眺めていたと思うので、あまりお叱り下さらぬよう）

この記述から、この叢書が「小品」を専門に集めたもので、長文は入れなかったことがわかる。また、その小品は單に筆記小説の類いだけではなく、經書や子書など、幅廣いジャンルの作品が範疇に入っていたことも窺える。

b. 収録の方針

②一、方今著作如林、而是書所取則非一卷之可以單行者勿錄、單行而連彙卷帙者亦勿錄。故雖在交契、實多闕如。
海内諸君子自能見諒。

(現今の著作は林のように多いので、この書が採取したものは一巻分で單行できないものは載せず、單行でも巻帙を跨ぐものはまた収録しませんでした。だから、〈作者と〉友誼があつても、〈掲載作品に〉缺如が多くなりますが、海内の諸君子よ、どうか〈この點を〉ご諒解頂きたい)

これは、aの記述とも關係するが、『虞初新志』とは異なり、『檀几叢書』は一巻で收まる分量のものを集めており、短編でも上・下卷になるようなものは入れなかつたということである。つまり、一巻一作品という原則があつた、というのである。これは『昭代叢書』も同様である。

c. 作品の入手先

③一、讀書所以明道、道不踰人倫日用之間。今茲所錄或採之於全集、或得之於專刻、一斑文炳、片羽吉光、總期無畔於道而已。

(讀書が道を明らかにする所以は、道が人倫日用の間を超えないからです。今この〈叢書〉の収録作品は、全集から得たり單行本から得たものですが、ひとひらの彩模様、ひとひらの輝き〈を放つ作品〉で、すべて道に背かないことを期してのことです)

この記述から『檀几叢書』に收められた作品は、全集或いは單行本からとつたものであることがわかる。

d. 書名の由來

④一、古有七寶靈檀几。几上有文字、隨意所及、文字輒現。現今書中爲經、爲傳、爲史、爲子集、爲禮節大端、爲家門訓戒、爲土物瑣屑、種種畢具。有意披覽展卷即得。名曰檀几、作如是觀。

(いにしえに七寶靈檀凡〈未詳〉)というものがあり、凡上に文字があり、意のままに文字が現れたといえます。今書中には、經・傳・史・子・集、禮の大要、家の訓戒、産物や細々としたものなど、あらゆる種類の作品が備わっています。書を廣げればご覽になりたいものが見つかることでしょう。「檀凡」と名附けたのは、ご覽の通りの理由です)

e. 張潮との出会いと共同作業

⑤一、編纂既成、自惟見聞隘陋。當時名公賢士之作、未能畢羅而悉彙之復不獲。亟登梨棗輒爲快快。甲戌初夏與天都張子山來晤於湖上、雅有同志力任校訂。其成舉先五十種附之劄劄。俾久滯案頭者一旦得公寓內、誠快事也。山來之功夫豈微哉。

(叢書の編纂が完了して思うことは、見聞が狭いということです。當時の名公や賢者の作品はまだ網羅してことごとく採録することができませんでした。〈そこで〉すみやかに叢書に登録したいと思っておりました。〈そのような折〉甲戌〈康熙三十三・一六九四年〉の初夏に天都〈揚州〉の張子山來〈潮〉と〈西〉湖で會い、同志の協力を得て校訂をお願いしました。完成していた先の五十種〈初集〉はこれ〈二集〉に附けて印刷することとなりました。しばらく案頭に滞らせていたものをひとまず書寓内に得たのは、誠に快事であります。〈張〉山來の功績は非常に大きいものです)

王暉はまた二集の序文で「而吾友張子山來復增補其所未逮(我が友張子山來〈潮〉がさらにまだ手に入らないものを増補してくれました)」と記し、さらに以下のように述べている。

予曩有檀几叢書之輯歲在乙亥。張子山來刻而傳之。其明年張子傲其意、又自爲昭代叢書、流布宇內、皆大雅君子所賞識。四方著作家以鱗鴻相托者、弃篋恆滿。于是予與張子復謀檀几二集、搜羅校訂互相商確郵筒往復月必二三。

(私は以前『檀几叢書』の編集を乙亥(康熙34・一六九五年)の歳に行いました。張子山來が翻刻してこれを傳えてくれました。その翌年(康熙35・一六九六年)張子はその意にならってまた自ら『昭代叢書』を作り、各地に流布し、大雅な君子に賞贊され知れ渡ることになりました。四方の著作家で作品を寄せてくる者は掃いて捨てるほどであります。そこで張子(張潮)と『檀几叢書二集』の刊行を謀り、(作品の)収集・校訂は互いに相談して定め、郵便の往復は月に必ず二、三回は行いました)

張潮も『昭代叢書』甲集の序文の中で、以下のように述べている。

僕賦性迂拙于世事、一無所好、獨異書祕笈則不啻性命、以之嘗欲集爲一編以稽覽。甲戌初夏晤王君丹麓于西子湖頭、出所輯檀几叢書、焚香共讀。予也載寶而歸校梓行世。頗爲同人所賞而吾家篋衍所藏尙存多種。稍加搜輯復成是編。如登羣玉之山、觸目皆琳瑯琬琰、入豫章之壑、一望盡杞梓榱桷分之。固各成一家之言。合之復亦大備八音之奏。至稽其姓字、大都五十餘年以內之人、廊廟山林無妨參錯天官地志都入網羅、目踵于前而篇幅稍溢。不欲私爲枕祕、願與同志者共欣賞而寢食之。雖不敢謂世人所好、盡與吾同然、使博雅好古之士讀之、當不至河漢予言也。

僕は生まれつき世事に疎く、一つも好むところはありませんでしたが、ただ異書や祕笈は生まれつき好きだけでなく、嘗てこれを集めて一編に纏めようと思ひ、ともに校訂・閲覽しておりました。甲戌(康熙三十三年・一六九四年)の初夏、王丹麓(王暉)と西子湖(杭州西湖)の畔でお會ひした時、(彼は)自身が集めた『檀几叢書』を

取り出したので、香を焚いて一緒に読みました。私は寶『檀几叢書』を載せて歸り、校訂をして出版したところ、大變同人たちから賞賛を受けました。そして我が家の竹箱に所蔵しているものもまだ澤山ありました。もう少し作品を探して付け加え、さらに完成したのがこの叢書『昭代叢書』なのです。まるで群玉の山に登ると、目前がすべて美しい玉ばかりであり、豫章の壑に入ると、一望がすべて良木大木であるようなものです。これを分けても、もとより一つ一つが一家言をなすものばかりなので、これを合わせれば、また八音の演奏に匹敵するものを備えております。その〈作者の〉お名前を見ると、おおよそここ五十餘年以内の人物ばかりですが、廊廟へに仕える人〈や山林へに住む人の作品〉が混ざるのは妨げず、天官へに屬すべき人〈や地志へに屬すべき人〉も、みな網羅しております。前人に續こうと目して、紙数がやや溢れてしまいました。ひそかに枕間に祕そうとは考えず、叶うならば同志たちとともに觀賞し、寢食をともしたいと思います。世の人の好みは、みな私と同じではないと思います。が、博雅好古の士にこれを讀ませれば、きっと私の虚言にはならないことでしょう。

ここで重要なのは、『檀几叢書』はもともと王暉一人で編纂作業をしていたが、出版を擔當したのが張潮であり、後に編集作業に加わった、ということと、張潮が『昭代叢書』甲集を編纂した契機の一つには、王暉と『檀几叢書』に出會ったことが大きく影響している、ということである。なお、引用文後半の「如羣玉之山」以下は、むろん『昭代叢書』の内容について述べているのであるが、このような方針は、『檀几叢書』がその前提に存在していたと考えられる。なお、王暉は杭州で編集作業をしていたようであり、張潮は一度西湖で王暉と會っているが、基本的に揚州で編集作業を行っていた。つまり両者は手紙や作品をやりとりしながら別々に編集作業を行っていた、ということである。

f. 編者自身の作品収録について

ここからは二集の選例で、張潮・王暉の共編である。これも5つの段落に分かれている。

① 遯選義例、前集已詳。但前係暉所定爲多、故潮之先集暨潮雜著無妨附見、而暉文一首不載。今此二集乃暉、潮兩人共輯則兩家著作不敢闖入隻字。匪惟臧拙、理亦宜然。

(選例は前集にすでに詳しく述べた通り。ただし前集は王暉が決めたものが多いので、張潮の先集〈初集〉に收めた雜著を附けることは妨げませんが、編者である)王暉の文章は一つも記載しません。今この二集は王暉・張潮兩人の共編なので、兩家の著作はあえて一つも挿入しません。ただ拙著を收藏しただけではなく、理屈としても當然のことでしょう)

『檀几叢書』は、編纂者自身の作品を叢書に載せない、という方針のようであるが、出來上がっていた初集には、既に張潮の作品が組み込まれており、今さら變更することが不可能だったのであろう。なお、餘集では兩者の作品が末尾に多く掲載されている。これは、張潮の友人である陸次雲の影響のようである。¹⁸⁾

g. 作品の提供者について

② 海陽胡子靜夫自白門郵到小品甚富、集中多所採用。厥功甚偉、奚可或忘。

③ 新城王阮亭先生郵種種小品、美不勝收。因篇目已定、不獲全登爲憾、嗣當採入昭代叢書乙集以成鉅觀。

(海陽の胡子靜夫〈胡其毅〉が白門〈南京〉より小品作品を澤山お贈り下さり、集中に採用されたものは多いです。その功績は偉大であり、決して忘れません。

新城の王阮亭〈王士禛〉先生がお贈り下さった小品作品は美しすぎるものばかりで〈我が叢書に〉收めるには堪え

ません。篇目がすでに定まっております、全てを採用することは出来ないことが遺憾であります。ついで『昭代叢書』乙集に採用致しますので、(こちらの叢書も)立派なものになることでしょう)

實際に王士禛の作品は、『昭代叢書』にも採録されており、そのいきさつについても張潮が王士禛に贈った書簡に説明がなされている。⁽¹⁹⁾

h. 作品の校訂について

④阮亭先生所寄別搜諸種、如華山經則楮多沍爛、字畫殘蝕、不敢妄補、姑爲闕文、或他時別見副本。然後補完以志慎重之意。

〔王阮亭 〔王士禛〕 先生がお寄せになった別にお探しになった諸作品ですが、『華山經』(二集・卷十七。東陰商の作)などは紙が濕って傷んでいるところが多く、文字は汚れたり缺損したりしておりますので、あえて妄りに補うことはせずにとりあえず闕文としておき、いずれ別に副本を見て、しかる後に補完して慎重を期したいと思います)〕

現存の『檀几叢書』が副本を見て補完したものなのか否かは不明だが、確かに黒く塗りつぶされていて不明な部分が數カ所存在する。

i. 作品の募集について

⑤此書之後、尙有檀几叢書餘集之輯、緣良朋投贈。輒有短篇、字不盈千、楮僅踰尺。然粒珠寸錦皆可寶貴。自當別梓以奏餘音。

(この叢書の後、なお『檀几叢書餘集』の編集がありますので、良友の投稿・寄贈に頼りたいと思います。短編の作品で、文字が千字に満たなかったり、紙が僅かに尺を超える程度のももあります。しかし、小粒な眞珠や小さい錦でもみな寶物です。きつと別に出版して餘音を奏でたいと思います)

實際にこうして更に集められた作品が、後に餘集として出版されているが、いつ出されたものなのかは不明である。

4. 『昭代叢書』「選例」に見られる編集狀況

4-1. 『昭代叢書』甲集の選例に見られる編集狀況

さて、次に『昭代叢書』の「選例」を甲集から順番に見てみよう。甲集の「選例」は7つの段落に分かれている。その中から編集に関わる部分をいくつか挙げてみよう。

a. 未入手書の搜索と贈呈の希望

以下4つは、總て未入手書に関する記述である。

②國朝諸先生筆記之書、有與僕所選爲類、而未能借光入選者、如尤悔菴先生之宮闈小名錄、宋牧仲先生之筠廊偶筆、王無異先生之山志、周減齋先生之因屋書影・閩小紀・字觸・同書、甘樾齋先生之四禮提要、冒巢民先生之影梅菴憶語、毛稚黃先生之匡林・澠書・韻學通指・韻白・詩辯坻、及先子之雲谷臥餘之類。卷帙浩繁、不敢僭爲節錄。儻世有大力者、合海內之奇書、都爲一集。是則僕之所引領而望者也。

(我が朝の諸先生の筆記作品のうち、僕の作ったものと同類で、まだご威光をお借りして叢書に収めることのできないものとして、例えば、尤悔菴〈伺〉先生の『宮闈小名録』、宋牧仲〈攀〉先生の『筠廊偶筆』、王無異〈弘撰〉先生の『山志』、周減齋〈亮工〉先生の『因屋書影』、『閩小紀』、『字觸』、『同書』、甘樵齋〈京〉先生の『四禮提要』、冒巢民〈襄〉先生の『影梅菴憶語』、毛稚黃〈先舒〉先生の『匡林』、『澗書』、『韻學通指』、『韻白』、『詩辯坻』、及び我が父〈張習孔〉の『雲谷臥餘』の類があります。〈これらは〉巻帙が夥しい量で、僭越にも節録することもできません。もし、世に大變力を持った者が、海内の奇書を合してまとめて一集とすることは、これは僕が領を引いて望むところであります)

③僕性耽幽寂、終歲杜門、足跡不踰里閭、縞紵罔及都邑。即生平素所仰慕以爲泰山北斗者、概不敢妄通姓字、以故名山大業、未能徧覽。如王阮亭先生之談文・談獻・談藝・談異、王西樵先生之朱鳥逸史・閩閣語林・群書頭屑・毛角陽秋、蔣虎臣先生之蔣說、毛大可先生之說麻、余廣霞先生之東山談苑・秋雪叢談・古今書字辨訛、李映碧先生之不知姓名錄、以至諸子虎男之橘譜、李子考叔之續南華、柴子虎臣之十九種、宏覺禪師之奏對機緣之類、或已經劖劘、或未授棗梨、寓目無由、徒深飢渴。儻有覓以見惠者眞不啻百朋之錫也。

(僕は靜寂を好む性格で、いつも家に閉じこもって郷里から離れず、交遊關係も都會に及ぶことはありませんでした。平素敬慕する泰斗の文人たちと、おおよそ安りに面識を得ようとしなかったので、〈彼らの〉立派な著書にもまだ目を通すことができませんでした。例えば、王阮亭〈士禎〉先生の『談文』、『談獻』、『談藝』、『談異』、『王西樵十種』先生の『朱鳥逸史』、『閩閣語林』、『群書頭屑』、『毛角陽秋』、蔣虎臣〈超〉先生の『蔣說』、『毛大可』〈奇齡〉先生の『說麻』、余廣霞〈懷〉先生の『東山談苑』、『秋雪叢談』、『古今書字辨訛』、李映碧〈清〉先生の『不知姓名錄』

及び諸虎男〈不詳〉先生の『橘譜』、李考叔〈不詳〉先生の『續南華』、柴虎臣〈不詳〉先生の十九種〈不詳〉、宏覺禪師〈木陳道忞〉の『奏對機緣』の類は、すでに印刷は出来ていても、まだ作品を授かっていないので、目を通そうとしてもすべが無く、ただ深く渴望しているものです。もしこれを求めて私に恵んでいただける者がいれば、まことに百朋〈朋は貨幣の單位〉を賜るのに勝る値打ちがあります。

以上2つに登場する作品は、現存しないものや不明のものもあるが、現存の作品を見る限りではほぼ長文であり、張潮の叢書に入れるべき作品では無いが、張潮の興味を引く存在であったことは間違いない。なお、この中で宏覺禪師の『奏對機緣』は、後に『昭代叢書』乙集に収録されている。次の④⑤も同様に自身の興味を引く作品について言及している。

④聞番禺屈翁山有屈氏叢書、不知凡若干種、或爲其自著、或選諸同人。惜未之見、不能爲拙選之光、寧非憾事。

〔番禺〈廣東番禺〉の屈翁山〈大均〉に『屈氏叢書』があるとお聞きしましたが、〈それが〉何種類ほど收められており、自著なのか同人の作を集めたものなのか分かりません。まだ見ることがなく、ご威光を借りることができないのが非常に残念です〕

⑤吾友王子不菴所著小品甚富、書藏山中、未隨行笈。寓漢皋時、曾郵其書目以示。及往索之則已客死楚中矣。迄今思之能無浩歎。

〔我が友王子不菴〈煒〉が著した小品はたくさんありますが、その作品は山中に所蔵しており、まだ文箱に入れた

ままで出回っておりません。漢皋（湖北漢口）に寓居していた時、その書目を送ってくれました。作品を貰いに行こうとした時には、〈王煒は〉すでに楚中（湖北？）で客死しておりました。今このことを思うと慨嘆しないわけにはいきません）

④⑤に登場する作品に關しては、可能であれば入手して叢書に入れたいと考えていたのかもしれない。

以上から張潮が叢書を編纂する上で、参考や掲載のために様々な作者の作品をかなり廣範圍に探し求めていた様子を窺うことができる。と同時に、これらの文章には遠回しにそれらの作品を入手したい、あるいは贈呈して欲しい、という願望が含まれているのではないか。

b. 作品の編集・出版方針

⑥文人嗜好、各有所偏、剛方者每憎綺語、疎狂者動疾迂談。僕則謂桑麻桃李、無非造化生成。布帛綺羅、盡屬女紅機杼、亦何必過煩區別。爲若果顯繁畔道之辭、則亦不敢採錄。若祇聞有小疵、則或僭爲刪逸、以成全璧。知我罪我、夫何恤焉。

（文人の嗜好はそれぞれ偏りがあります。剛直な者はいつも美辭麗句を憎むものだし、そっかしい愚か者はややもすれば回りくどい言葉遣いを憎むものです。僕が思うに、桑麻や桃李は創造主が生成したものだし、布帛や綺羅は女工が機で織って作ったものだから、どうして區別するのが困難でしょうか（區別は明白である）。そのためもし正論に反する言葉があれば、またあえて採録しませんでした。もしただ聞々小さな間違いがあつたならば、或いは假に刪逸しておき、體裁を整えたいと思います。我が罪を知つたとしても、憂えることはありません）

⑦昭代右文新編日盛、計耳目所及可入叢書者、何啻數百種。茲祇以五十種爲額。蓋少則易于成書、且便于行世也。每見盈尺大部之書、刻者既苦劬劬維艱、購者復歎朱提不易。雖多亦奚以爲。儻天假我以年俾得每年刻五十種行世、斯則僕之所矢願也。

(昭代〈朝代Ⅱ清代〉)の文章は日々盛んに作られており、耳目の及ぶ限りでは叢書に収めるべきものは數百種を下りません。この編はただ50種を定額とします。思うに〈作品の數が〉少ない方が書を編纂しやすく、その上世に出すのに便利でしょう。大部の書を見るごとに、出版する者が出版する困難さに苦しみ、購入する者がまた價格が高いことに嘆くものであれば、〈収録作品が〉多いとしてもそれにいったいどんな意味があるでしょうか。もし天が私に年ごとに五十種の小品を刻して世に出させていただくことが、私の切望するところです。

⑥の文章からは、文人たちには様々な嗜好があるので、その嗜好の種類については特に問題としないが、ただ正論に反するものについては採録せず、また小さな問題があった時には、その部分を削除したことがわかる。⑦は出版者や讀者の便を考えて、五十種、つまり五十巻を叢書の定額にしたことがわかる。

4—2. 『昭代叢書』乙集の選例に見られる編集狀況

乙集の「選例」は7段落に分かれている。以下、いくつか見てみよう。

a. 収録作品の作者は、清代の人物

①遴選義例、已詳前甲集中。但前選間有明季人物。今此集則盡屬本朝諸先生著作。高山仰止讀者應有同心也。

(選例はすでに前の甲集に詳しく述べた通りです。今この集はすべて本朝の先生の著作です。高山を仰ぎ見ること

は、ただ讀者も心を同じにすることでしょう)

ここで、前集と異なるのは、乙集は原則として清の人物の作品を集めたということである。確かに、甲集には余懷や冒襄など、明の遺民の作も混ざっていたが、乙集ではその顔ぶれががらりと入れ代わっている。

b. 作品の贈呈

②良朋枉顧、輒贈新編。是集祇從所見者稍爲編次。竝不敢徵之四方。遺漏之議所不免矣。

(良友がわざわざお越しになり、新作を贈って下さいました。この叢書は見たものに従って編纂したものです。敢て四方に求めたわけではないので、遺漏があることは免れません)

この記述から考えるに、乙集に至ると張潮がもともと所有していた作品のストックは底をついたのかも知れない。その代わりに、友人・知人たち、もしくは全くの他人からの投稿原稿が増大したようである。

c. 中縫への記名

④從來編輯叢書、類多以各種書名列于中縫「如漢魏叢書・百川學海・說郭・祕笈之類」。苟有遺失錯亂、卒難查考。拙選中縫必用叢書總名、至各家名目祇注于總名之下。仍備列卷帙、次第不獨觀者無難一目了然、即典籤記室整理臧弁亦易于從事也。

(從來、叢書を編集するのに、多くは各種の書名を中縫に列する者が多い「例えば、『漢魏叢書』『百川學海』『說郭』『祕笈』の類のように」。もしも遺失や錯誤があった場合には、結局査が困難となります。拙選では中縫には必ず叢書の總名を用い、各家の題目に至っては、ただ總名の下に注しました。よって、きちんと巻帙の順序を並べれば、

見る者が一目瞭然なだけではなく、典籤や記室（ともに古代の官名。記録を擔當する）が整理する場合もまたやりやすいでしょう。

張潮は、自らが編者ということもあり、後世の編者が編集に困らぬよう、様々な工夫をしていたようである。

d. 生計の逼迫と丙集の編集について

⑥ 僕賦性迂拙不諳經營。自去歲孟夏以來生計蕭條益甚。此集之成、蓋已拮据萬狀矣。嗣後或有投贈新編、竊恐嚮往有心流通無力、徒滋顏甲而已。卽此集之外存爲丙集之用者、尙餘多種、未審何歲。始副子懷姑、卽其名目錄之別格以自策勵云。……

⑦ 種種拙選、祇爲揚芳、匪圖射利、但紙張刷印、殊費朱提。若人人如取如攜則在在傷廉傷惠愛人以德告我。同儕倘果癖嗜瘡痂、何妨略償工價〔每書百葉、實銀五分〕。或同志釀金合印、或攜貲轉覓坊間、庶好書不歎難逢而奇文易于共賞也。

（僕はもともと世渡り下手で經濟にも疎い性格です。去年（一六九九年）の孟夏以來生計が苦しくなってきました。この乙集の完成する頃には、かなり厳しくなっていることでしょう。引き続き新作を投稿する者がいても、恐らく意欲は有っても作品を流通させる力は無く、ただ汗顔の至りです。この集以外に丙集のために採用すべき作品はなお多種にわたりますが、いつ（出版できる）かはわかりません……種々の我が作品はただ芳を伝えるために作ったのであって、營利を謀つてのことではありませんが、ただ紙代や印刷代はかかります。もしどなたか援助して下さる方がいれば、清廉を損ない、利益を損なっても、徳によって人をいつくしむ氣持ちのある方を私にお知らせ願いたい。仲間内でもし瘡痂（へゲテモノ）、ここでは小品文のことを指す）がお好きな方がいれば、費用を工面して頂

くことは妨げません「百葉ごとに銀五分かかります」。或いは同志がお金を出し合うか、或いは資財を擲って市中に買い求めていただければ、素晴らしい書物が難に遭ったとしても嘆くことはなく、珍しい文章が共に觀賞し易くなります)

これは前述の一六九九年の事件以降生計が逼迫し、その經費を廣く同人に求めていた様子が描かれている。

4—3. 『昭代叢書』丙集の選例に見られる編集状況

それでは最後に『昭代叢書』丙集についてみてみたい。丙集は前述の通り張潮が事件に遭い、資金も氣力も失った後に編纂された最後の叢書である。その「序文」や「選例」は康熙癸未（一七〇三年）の五月に制作されている。

a. 共編者張漸の言

この丙集は前述の通り弟張漸（號は木山）との共編となっている。丙集にはその張漸の序文が掲載されているが、これまでの編集過程や、當時の状況が簡潔に述べられているので、まずは少し見とおこう。これは序文の記載よると康熙癸未（一七〇三年）仲夏に制作されたものである。

…而輯之既久、則輯者固賴作者以傳、作者亦賴輯者以行。遠是輯者與作者交相需殷、而甲集之後遂不能不繼之以乙矣。乙集出則又事多于前、文異于舊。天下之人之讀之者、安得不引領而望其更以繼此乎。矧夫郵筒投贈之來、日接於庭、琳琅璀璨之篇、日盈於几。家仲兄顧而樂之、左把酒盞、右施丹鉛、矻矻而不能已。予起而進曰、此盛舉也。曷不使弟同之。弟昔見兄之輯檀几叢書也、有王子爲之權輿。因卽與之、共成其事。今甲乙而後遞及于此。弟亦力爲

蒐訪、曷不俾一校訂于其內乎。于是竝爲編次、復勒成書。書既成、兄顧而笑曰、此之所爲、雖不足以當史家三長之目、然而去就取舍、似不可無分別之識以斷制之。今幸得弟以勸厥業、顧我有此嗜而亦有此嗜乎、而有此嗜而竟能成我之所嗜乎。昔蘇東坡有言、曰四海相知一子由。其殆今日之謂乎。：

(…これを編集してもう長い時間が過ぎましたが、編者はもとより作者に頼って傳え、作者もまた編集者に頼っておこなってきました。遠く編集者と作者とが互いに求めること盛んで、甲集出版の後、遂に乙集を出して繼がないわけにはいかなくなりました。乙集が出ると、また作品中の事がらは前よりも多くなり、文章も以前よりも素晴らしいものになりました。天下の人でこれを讀む者は、襟を引いてその續刊を望まないことはありませんでした。ましてや、郵送されて贈られてきた作品が、日に日に庭にいっぱいになり、素晴らしい作品が、日に日に机の上に堆く積まれました。仲兄〈張潮〉はこれを顧みて楽しみ、左手には杯を持ち、右手には朱筆をとって、こつこつと〈作業を〉續けました。私は思い起こして進んで言いました。「これは盛舉であります。どうして私を仲間に入れてくれないのですか。私は昔兄が『檀几叢書』を集めた時、王子〈王暉〉がそのために喜んで〈作品を?〉載せて運んできました。そこですぐにもに行い、その事〈編集〉を成し遂げたのを目の當りにしました。今甲、乙集〈が完成し〉その後ここに至っております。私にも力いっぱい収集活動を行い、一つでも校訂作業を行わせて下さい」と。そこでともに編集を行い、また叢書が完成したのです。叢書が完成して、兄が顧みて笑って言いました。「今回の事は、史家の三長『史通』の語、「才・學・識」の目には足りないが、しかしながらその取捨選擇は、分別する識見が無ければ、これを判斷することは出来ない。今幸いに君がその作業に勵んでくれた。顧みれば、私にこの嗜み〈小品を好むこと?〉があったから〈君も〉またこの嗜みを持たたのか。〈君に〉この嗜みがあったから、私の嗜みとすることができたのだろうか。昔蘇東坡が「四海廣しと雖も私のことを理解するのは子由〈弟蘇轍

の字」だけだ」と言ったが、それはほぼ今日の〈我々の〉ことを言っているのだ」と。…

張漸は『昭代叢書』甲集・乙集編集からの状況を述べているが、特に兄張潮が楽しそうに編集作業に従事していた様子語っている。しかし、張漸は觸れていないが、後述の張潮の序文にある通り、困窮のために叢書の出版を断念していた張潮に對して後押しと手傳いを申し出たのが張漸であった。張漸の獻身的で精力的な助けを得て、『昭代叢書』丙集は完成した。それに感謝した張潮は、自分と弟を蘇軾と弟蘇轍に譬えて賞賛した、という内容である。

b. 収録作品の校訂について

②前選各巻、俱借光諸名家先生校定。然亦必素所往還、非敢漫然從事也。不謂諸知交紛紛、見屬設有遺漏。獲罪良多、是以茲集概不復用。

(前の叢書各巻は、つぶさに諸名家先生のお力を借りて校訂していただきました。しかしながら、またもともとその〈校訂の書簡の?〉やりとりは、ゆっくりと行ったものではありませんでした。思いがけず友人・知人たちのやりとりは、ごちゃごちゃとしてしまい遺漏が見られました。非常に罪が重いのですが、そこでこの集で再び用いることはしませんでした)

これは、編集作業が時間に迫われ、また贈られてくるものが多過ぎたために間違いや遺漏があったことを示している。

c. 叢書編纂の動機

⑤窮愁著書、乃其人一生精神學問所存、原欲流傳于世、然未及梓行。勢必終歸淹沒。故僕前後諸選、于友人未刻鈔本、尤所繫懷。

(書を著すのに困しむのは、やはりその人の一生における精神や學問を、もともと世に流傳させたいと思つても、いまだ出版できないからであります。〈出来なければ〉その勢いは必ず結局のところは埋没してしまいます。だから僕の前後の諸選は、友人の未刻の鈔本について、もっとも思いを巡らしているのです)

これは、張潮が多くの叢書を編纂した理由を、非常に端的に表しているといつてよいであろう。

d. 編集期間について

⑥是集經始于庚辰之冬、告成于癸未之夏。較之往集、爲日頗遲、觀者可以想其所處矣。

(この集への編纂)は庚辰(康熙39・一七〇〇年)の冬に始めて、癸未(康熙42・一七〇三年)の夏に完成しました。これを前集と較べると、〈作業が〉かなり遅いのですが、お察し下されば幸いです)

この編集期間が長期化した原因の一つは、むろん前述の一六九九年に起こった事件の影響であろう。

e. 海賊版への喚起と調査願ひ

⑦翻刻之禁、昔人所嚴、邇來當事諸公類多寬厚長者、而選刻之家、其力又不能赴閩終訟。是以此輩益無忌憚、惟附之浩歎而已。僕所梓四書尊註會意解、大受翻板之累。伏願今八閩當道諸先生、凡遇此等流、力爲追劈僞板、究擬如法其所造、誠非淺渺、僕當以瓣香供養之。

(翻刻の禁止は、昔人が厳しくするところですが、これまで當事者の諸公は大抵心が廣く穩やかな者が多いし、選刻する家は、閩(福建)に赴いて訴えることなど出来ません。そこでこのような輩はますます遠慮が無くなり、ただ泣き寝入りをするしかありません。僕が出版した『四書尊註會意解』(未詳)は、大いに翻刻(複製)の被害を

受けました。伏して願うのは、今八閩に顔の效く諸先生は、もしこのような輩に出遭ったら、極力海賊版かどうかを追跡して、本物かどうか究明して下さい。〈出回っている海賊版が〉本當に微少でないとしたら、一つまみお香を焚いて、これ〈海賊版の版本?〉を供養〈處分?〉したいと思います)

閩(福建)は、さまざまな書坊が存在し、出版の盛んな場所として知られていた。そこで海賊版も出回っており、張潮が出版した作品もその被害に遭っていたようである。この『昭代叢書』も被害に遭わぬよう、閩方面に顔のきく知人に依頼をしている。これは當時の出版事情を考える上でも非常に興味深い。

f. 生計の逼迫と續編の企畫

僕自己卯歲失足以來、生計蕭然、日就困憊。乙集已自拮据。故不復作鉛槧之想。緣舍弟木山力爲憇憇、搜輯共襄厥成。是以復有是役、自後諸知交或有大著見貽、姑什襲珍藏以待機緣之至。

(僕は己卯〈康熙38・一六九九年〉の歲に足を失って以來、生計が苦しくなり、日に日に困窮していききました。乙集の段階で既に難儀していたので、再び叢書の編集・出版を考えませんでした。舍弟の木山〈張漸の字〉が懸命に〈編纂を〉勧めてくれたことで、作品の搜索や収集はともに行つて完成しました。そこでまた叢書の編纂作業を行うこととしました。今後友人たちから大著が贈られてきたら、しばらく大切に祕藏してよい機縁があるのを待ちたいと思います)

この記述から、丙集の編纂に弟張漸が大きく貢献したことから、更に友人たちの作品が贈られてきた場合には、次の叢書編纂も考えていたことがわかる。残念ながら、その續編は現存しないし、それに關する記述も見當たらな

おわりに

以上、張潮編纂の叢書『虞初新志』『檀几叢書』『昭代叢書』の編纂状況について、その「凡例」や「選例」を中心に順を追って考察してきた。そこから分かったことをまとめると、以下のようなようになるであろう。

①張潮はもともと文言小説を含めた筆記・雑記などの短編作品、いわゆる小品文の熱狂的な愛好家であり、蒐集家でもあった。始めは自分で讀むためにそれらを集めていたが、やがて叢書に纏めようと考えた。その大きな理由は、一つには後世に残すためであり、もう一つは同好の士の觀賞に供するためであった。

②張潮はもともと自ら入手したり、所有していた作品の外に、友人・知人に未發見の小品文の搜索・収集を依頼したり、贈呈を受けたりした。場合によっては、作品の所在や所有に関する情報の提供も求めた。

③そうして新たに作品を得た張潮は、一六八三年に出版された『虞初新志』を皮切りに、一六九〇年代後半から一七〇〇年前半にかけて次々と叢書を編纂、出版していった。その間に、張潮の事業を知った小品作家たちから、更に多くの作品が送られてくるようになった。

④叢書編纂の方針は、3つの叢書でほぼ共通しているが、『虞初新志』は文言小説を中心に纏められ、『檀几叢書』『昭代叢書』はその他筆記・散文が中心となった。

⑤『虞初新志』は若干異なるが、『檀几叢書』と『昭代叢書』については、一集五十卷、一卷一作品という原則で纏められ、五十卷になるごとに出版していたようである。そして、作品はその一卷に收められる分量のものに限定し、巻を跨ぐような比較的長い作品は採用しなかった。

⑥ 掲載作品の順番は、あくまで原稿が到着して張潮が目を通し、校訂作業が終わったものから順に収録されている。作品の作者や内容には原則として左右されなかった。

⑦ 『檀几叢書』はもともと王暉の選であったが、その校訂や出版に苦慮していた。その時張潮と出会い、張潮の力によって出版に漕ぎ着けた『檀几叢書』初集・二集。また、『昭代叢書』甲集は、その『檀几叢書』編纂過程の中で制作が決められたようである。このような王暉との関係から、『檀几叢書』と『昭代叢書』の間で作品の移動も行われていたようである。

⑧ 順調に叢書を次々と編纂していた張潮であったが、やがて一九九九年に起こった投獄事件を境に、生活の困窮や編集意欲の減退、またそれに比例して投稿作品が急増したことなどもあって、處理が追いつかなくなり、そして編纂の經費も逼迫してきた。張潮は弟張漸など他者の力や、資金援助などを受けながら、『昭代叢書』丙集の編纂にまで至ることができた。さらに、次の叢書の編纂も計畫していたようであるが、それは果たせなかったようである。

⑨ 張潮の叢書の編纂順は、大雑把に見ると『虞初新志』（八卷本）へ一六八三年？へ『檀几叢書』初集・二集へ一六九五年へ『昭代叢書』甲集へ一六九六年へ『檀几叢書』餘集？へ『昭代叢書』乙集・『虞初新志』二十卷本へ一七〇〇年へ『昭代叢書』丙集へ一七〇三年となる。

張潮が残したこれらの叢書は、後世各分野の研究に大きく寄與しているが、これまであまりその編纂過程にまで言及されることはなかった。今回は、叢書の選例を中心に、その一端を考察したまでであるが、まだまだ不明な点が多い。だが、この編纂過程の中に多くの文人たちが關與していることは間違いない、それらを詳しく考察していくことによつて、當時の江南一帯を中心とした文人ネットワークの一端が明らかにされていくと思われる。ところで、張潮には友人たちと交わした書簡⁽²⁾が存在している。その中には叢書の編纂に關わる内容のものも少なくない。今後さらに編集状況を

詳しく考察する上で、これらは非常に有益な資料である。今回の考察を一段階として、次回は書簡の記述と比較考察してみたいと考えている。

注

- (1) 合山究譯注『幽夢影』（中國古典新書・明德出版社・一九七七年）
- (2) 例えば、王意如・李元秀「從『虞初新志』看明清之際士人的文化心態」（重慶教育學院學報）第18卷・第1期・二〇〇五年一月）、安平秋・宋景愛「論張潮的編輯思想」（中國典籍與文化）總63號・二〇〇七年・第4期）、張小明「論張潮《虞初新志》對虞初體的貢獻」（『黃山學院學報』第9卷・第1期・二〇〇七年二月）、高旖璐「張潮與《幽夢影》」（萬卷樓圖書股份有限公司・二〇〇四年）、劉和文「張潮研究」（安徽大學出版社・二〇一一年六月）などあり、適宜參考とした。
- (3) 小塚由博「張潮『幽夢影』評語研究初探」（大東文化大學『漢學會誌』51號・二〇一二年三月）、「張潮の交遊關係について——『尺牘友聲集』と『尺牘友聲偶存』を手がかりに——」（大東文化大學『漢學會誌』52號・二〇一三年三月）、「余懷と張潮——作者と編者の關係を中心に——」（『大東文化大學紀要』（人文科學）51號・二〇一三年三月）など。また第65回日本中國學會大會（二〇一三年十月十三日・秋田大學）にて「明末清初江南文人の交流狀況——張潮の書簡を手がかりに——」と題して學術發表を行った。
- (4) なお、本論で使用するテキストは以下の通りである。
 - ①『虞初新志』（上・下巻、『古本小説集成』第六七九、六八〇冊・上海古籍出版社影印・一九九四年）上海圖書館康熙刊本。
 - ②『檀几叢書』（上海古籍出版社影印・一九九二年）上海圖書館康熙三十四（二六九五）年新安張氏霞舉堂刊本。
 - ③『昭代叢書』（全四冊。上海古籍出版社影印・一九九〇年）※ただし、後述の通り、『昭代叢書』には複数のテキストがあり、収録作品が若干異なる。本稿では適宜別のテキストも参照した。
- (5) 例えば、張潮が余懷に贈った手紙に、「虞初拙選借光王翠翹傳。茲先以八卷成書。聽坊人發兌、想明春吳門亦可購矣（我が『虞初新志』はあなたの「王翠翹傳」〈卷八所收〉のお陰で箔が付きました。まずは八巻で一書とします。書坊が印刷して賣りに出すとのことですので、來春には吳門〈蘇州〉でも買い求めることができるでしょう）」（『尺牘友聲偶存』卷二「寄余澹心微君」）云々とある。但し、本當にこの年に出版されたのか否かは不明である。

(6) 但し、前掲『古本小説集成』本の解説に指摘するように、一七〇一年以降に完成したと思われる作品が収められていることから、現存する版本がいつ刊行されたものかは不明である。

(7) 例えば、國立公文書館所蔵本、東北大學狩野文庫本など。

(8) 例えば、前掲安平秋・宋景愛「論張潮の編輯思想」では、「以讀者爲主體的編輯原則」、「注重時人之作的編輯工作」「認爲圖書有益于人生日用」「重視作品的趣味性、創新性」「致力於保存文化典籍」と5つに分けて論じている。

(9) なお、この「自序」は張潮の文集『心齋聊復集初集』にも収録されている。

(10) 「古今小説家言、指不勝僂。大都鉅釘人物、補綴欣戚、累牘連篇、非不詳瞻。然優孟叔傲、徒得其似而未傳其真。強笑不權、強哭不戚。烏足令耽奇攬異之士、心開神釋、色飛眉舞哉。況天壤間、瀨氣卷舒、鼓盪激薄、變態萬狀、一切荒誕奇僻、可喜可愕可歌可泣之事。古之所有、不必今之所無、古之所無、忽爲今之所有、固不僅飛仙盜俠牛鬼蛇神、如夷堅艷異所載者爲奇者矣。此虞初一書、湯臨川稱爲小説家之珍珠船。點校之以傳世、洵有取爾也。獨是原本所撰述、盡唐人軼事、唐以後無聞焉。臨川續之合爲十二卷。其間調笑滑稽離奇詭異、無不引人着勝、究亦簡帙無多、蒐采未廣。予是以慨然有虞初後志之輯、需之歲月始可成書、先以虞初新志授梓問世。其事多近代也、其文多時賢也。事奇而覈、文雋而工。寫照傳神彷彿逼肖。誠所謂古有而今不必無、古無而今不必不有。且有理之所無、竟爲事之所有者。讀之令人無端而喜、無端而愕、無端而欲歌欲泣。誠得其真而非僅傳其似也。夫豈彊笑不權、彊哭不戚、鉅釘補綴之裨官小說可同日語哉。學士大夫酬應之餘、伊吾之暇、取是篇而瀏覽之、匪惟滌煩祛倦、抑且縱橫俛仰、開拓心胸、具達觀而發曠懷也已。康熙癸亥新秋心齋張潮撰」

(11) 例えば、『虞初志』（排鉛本、北京中國書店・一九八六年）湯顯祖「點校虞初志序」に「虞初一書、羅唐人傳記百十家中、略引梁沈約十數則、法奇僻荒誕、若滅若沒、可喜可愕之事、讀之人心開神釋、骨飛眉舞、雖雄高不如史漢、簡澹不如世說、而婉轉流麗洵小説家珍珠船也。其述飛僊盜俠、則曼倩之滑稽。志佳冶窈窕、則季長之絳紗。一切花妖木魅、牛鬼蛇神、則曼卿之野飲」云々とある。

(12) 前掲『古本小説集成』本には存在しない。ここでは、一九五四年、文學古籍刊行社本（排鉛本）の「總跋」の原文を挙げておく。「予輯是書竟、不禁喟然而歎也、曰嗟乎。古人有言、非窮愁不能著書以自見於後世。夫人以窮愁而著書、則其書之所蘊、必多抑鬱無聊之意、以寓乎其間。讀者亦何樂聞此如怨如慕、如泣如訴之音乎。予不幸、於己卯歲誤墮坑井中、而肺腑中山不以其困也。而貴之猶時時相囁嚶、既無有有道丈人相助舉手、又不獲遇羸隱娘輩一泣訴之。唯暫學屬提波羅蜜、俟之身後而已。於斯時也、苟非得一二奇書、消磨歲月、其殆將何以處此乎。然則、予第假讀書一途以度此窮愁、非敢曰唯窮愁始能從事於鉛槧也。夫窮愁之際、

尙欲借書而釋、況乎居安處順、心有餘閑、焚香靜讀、其樂爲何如乎。因附記於此、俾世之讀我書者、兼有以知我之境遇而憫之。世不乏有心人、然非予之所敢望也。康熙庚辰初夏三在道人張潮識」

(13) 『史記』卷七十八・平原君虞卿列傳・虞卿、司馬遷の言に、「然虞卿非窮愁、亦不能著書以自見於後世云」とある。

(14) 例えば、馮保善解說『全譯幽夢影』（三民書局・一九九八年四月）の解説2頁に、「如果說這些不幸使青少年的張潮心靈蒙受了陰影、那麼、康熙三十八年（一六九九年）五十歲的銀鐮入獄、更讓近於老年年的張潮感受到恥辱、給他以巨大打擊。他在康熙庚辰（一七〇〇年）作〈虞初新志總跋〉之中記下了這屈辱不平的一頁：「予不幸、於己卯歲誤墮坑井中、而肺腑中山不以其困也賈之、猶時時相嘔噦。」負義的中山郎令張潮憤怒、在其《虞初新志・劍俠傳》評語中、他再次表現了自己的這種情緒、說：「予嘗遇中山郎、恨今世無劍俠、一往愬之」とある。

(15) 例えば、張潮が王暉に贈った手紙に「…弟生平頗謹慎自愛、不謂料事缺精、變生意外、以致家人、生產耗損、大半所存、僅十之二三。將來生計艱難、不知作何究竟矣。昔柳柳州于王參元、不以弔而以賀。弟今日與之相反。蓋平昔知交、皆不我鄙棄辱之、聲氣之末、一旦遭此大挫、心亂神昏、誠恐自此如才盡之、江淹有虛知己、屬望更增惆悵耳」（『尺牘友聲偶存』卷七「寄王丹麓」）と述べている。

(16) 「四懷詩」は前掲劉和文『張潮研究』180頁の附録一に原文あり。これは『百家詩選』より取ったものであるとするが、未詳。

(17) 『心齋聊復集初集』に「徵選外史啓」有り。

(18) 陸次雲（字は雲士、浙江錢塘の人）は、古今の著述を集めた『古今文繪』という叢書の編者であるが、張潮はその叢書の編纂方法をお手本にしたようであり、後日王暉に手紙を贈ってそれを紹介している。例えば、「見陸雲老所刻古今文繪、竟以己文列後、惟于題下用附政二字。此法似屬可行」（陸雲老の編纂した『古今文繪』では結局のところ自分の作品を後に並べており、ただ題名の下に「附政」の二字を記しています。この方法は見習うべきだと思います）（『尺牘友聲偶存』卷七「與王丹麓」）と陸次雲の編集方法を例に挙げて王暉に勧めている。なお、實際に『檀几叢書』餘集では、張潮・王暉の作品が末尾に附されており、その題名の下には「附政」と記されている。「附政」は「附載」の意味か。いずれにせよ『古今文繪』の編纂方法を自身の叢書編纂に役立てていたことが窺える。

(19) 例えば、『尺牘友聲偶存』卷七「寄復王阮亭先生」に、「瑯函三錫兼五種奇書、貧兒驟獲珍珠船、感載匪可言喻。亟欲借光、因時乙集已定編目、裁去數種以便增入。蓋欲使諸同人早睹瑯環、非特阿私所好也（あなたから幾度も手紙を賜り、五種類の奇書を併せて頂戴して、貧兒が寶の船を得たかのように喜び、その感動は言葉に表すことができないほどです。すみやかにあなたのご威

光を借りようと思いますが、ちょうど『昭代叢書』乙集の編目が決定したところで、數種類を削除して（あなたの作品を）入りたいと思います。（ただしこれは）諸同人が早くあなたの作品を見たいと思っているのであって、（私の）個人的好みだけではございません」とある。

(20) 『論語』子路第十三「子曰、誦詩三百、授之以政不達、使於四方不能專對、雖多亦奚以爲」

(21) 蘇軾「送晁美叔發運石司年兄赴闕」〔蘇軾詩集〕〔中華書局・一九八二年〕第六冊・1895頁に「我生二十無朋儔、當時四海一子由」とある。

(22) 『尺牘友聲集』と『尺牘友聲偶存』 詳しくは前掲・拙論「張潮の交遊關係について」『尺牘友聲集』と『尺牘友聲偶存』を手がかりに―などを参照。